

妙義山縦走

山口
縦走



私の好みからすると、妙義山は日本百名山の番付に載る資格は十分ある。高さは一〇〇〇メートルとすこしの低山ながら、白雲、相馬、金洞と砦のような岩山を連ねた姿はじつに魅力的で、麓のあちこちから眺めてこんなに変化に富んだ山は、そうざらにはない。冒険好きな登山者には、肝を冷やしてくれるルートにもこと欠かない。名山として推すゆえんだ。

十五か十六のとし、親友の〇とふたりで張りきって出かけたのが、私の妙義の初山行だった。石門、カニの横這い、大砲岩と観光コースを探勝したあとで、涸沢をつめて稜線に上がり、岩稜の鎖場を金洞の中の岳の頂上によじ登った。少年ふたりの冒険心はここで大いに満たされたわけだが、余勢を駆って、一本杉の茶屋から目の前にマッターホルンのごとく望まれる（少年の目にはまさにそう映った）筆頭岩に挑戦したのは、記念すべき壮挙であった。

なにしろ茶屋のおやじに「妙義山に百人きても筆頭岩に登るのはそのうちの一人もいない」とおどかさされたので、そそり立つ戸渡りの岩稜を鎖をたよりによじ登って、

岩のてっぺんに立ったときの大感激は、それから六十年たったいまでもよく憶えている。私の岩登りは、妙義山でその洗礼を受けたといっている。

その後、おとなになってからは遊山気分で何度か妙義に行ったが、表妙義から裏妙義までの縦走を企てて、若い友人を誘って出かけたのは十年ぐらい前の夏のはじめのことである。麓のブドー園あたりから、深いギャップの切れ込んだ稜線を仰いで、それを縦走してみたいと、かねてから考えていたのだ。

妙義神社から急坂を大ノ字に登って、濡れて滑りやすい長い鎖に緊張しつつ奥ノ院に至り、見晴しを経て白雲山の頂上に立てば、そこからいよいよ表妙義の縦走が始まる。天狗岳を過ぎてガクンと下り、相馬岳に登って、またガクンと下りになる。鎖で岩を登ったり下ったりするので、大いに腕力と神経を消耗させられる。もし鎖が無かったら、この岩尾根はまちがいなく日本でも第一級の難コースだろう。

相馬岳からキレットに下り、バラ尾根をたどって、鷹戻しの難所となる。鎖の横這いをする所もあり、ぐらぐらの梯子登りをやらされる所もある。そのぐらぐらの梯子

の壁には墜死した遭難者を追悼する銅板が嵌めてあり、それを見たたん、股のあたりが縮みあがった。そこにくらべれば、最後の三〇メートルの鎖登りは、いくらか痛快でないこともなかった。

鷹戻しを過ぎても、なお岩の上下がつづき、そろそろ日が傾きだして、あちこちとビバーク地をさがしたが、狭い岩尾根は二人分のツェルトザックが張れる場所がなかなか得られない。金洞の東岳を過ぎてしばらく下った所で、やっと二人が横になれるスペースを見つけて、そこでビバークすることにした。下が切れ落ちているので、空中にいるような気分だった。

翌日、中ノ岳から、石門コースからの道がのぼってくるコルに下って、西岳を越え、星穴岳をめざしたが、足場が悪くなって尾根づたいに行けるルートがつかめない。裏妙義どころではない、残念だがそこで敗退ということになってしまった。こんどは縦走なんかじゃなく、あの魅力的な星穴岳の岩峰だけをめあてに、その征服の再挙を図ろう。

——そんな宿題が残されることになったが、それにしても表妙義の縦走は期待したとおり、スリリングで面白かった。鎖登りで腕力がきれたら落ちて一卷の終り、という危険性は十二分にある。

妙義町に戻って、お土産屋のおやじに、妙義山は遭難事件が多いのじゃないかと訊いたら、「遭難なんか珍しくもねえ。ことしはもう三人も落ちて死んだ」と、おやじは答えた。